
発達理論の学び舎

Back Number: Vol 41

Website: 「[発達理論の学び舎](#)」



目次

- 801. 時系列データの予測とネットワーク科学
- 802. 習慣としてのオランダ語学習について
- 803. 心理空間の差異化と時間的拡張過程
- 804. 幼少の頃から:存在の固有の色と原点
- 805. 知人の送別会へ向けて:ワインとチーズについて
- 806. ネットワーク科学と過去の日記から
- 807. ブダペストでの探究活動の可能性
- 808. 外国人に対するオランダの各種補助制度と欧州での永住権について
- 809. オランダでの家の購入について
- 810. 歩き続ける姿とその軌跡を見守って
- 811. 内側の声に従って生きる道を歩むこと
- 812. 問題解決と発達
- 813. 書くこと・考えること・学ぶこと
- 814. 60年後のその日に向かって
- 815. 体現的認知とエントロピーの推移
- 816. 濃霧と巨大なエネルギー体
- 817. 状態空間分析と状態空間グリッド
- 818. グループダイナミクスの原体験として
- 819. うららかな春の朝の恩寵
- 820. 神々が宿る鳴き声と道

午前と午後の仕事がひと段落ついたため、夕方からは、これまでなかなか着手できなかった探究領域を少しずつ開拓し始めることができた。一つには、現在探究しているダイナミックシステムアプローチや非線形ダイナミクス的手法とは少し異なり、純粋に時系列データから将来予測を行うための理論や方法について学ぶことである。

このテーマについては、私にとって馴染みのあるプログラミング言語のRを用いて行うことができるため、手を動かしながら探究がしやすいという利点がある。具体的に参考にしてきたテキストは、“Practical Time Series Forecasting with R (2016)”と“Introductory Time Series with R (2009)”である。後者の書籍は、Springerという出版社のものであり、この出版社は非常に専門的なテキストを世に送り出している印象がある。実際に、前者の書籍に比べて、後者の方が難解であるため、最初に取りかかるべきテキストは前者のものだと判断した。

時系列データの解析と予測に馴染みのない者にとっても、前者のテキストは格好の入門書だと思う。とにかく説明が明瞭であり、なおかつ、実践的な演習も組み込まれているため、独学で学習を進めていきやすい作りになっている。このテキストを数章読み続けて、本日の探究にかける時間がまだ余っていたので、その次に、ネットワーク科学のテキストを紐解くことにした。フローニンゲン大学で現在私が所属しているプログラムのコーディネーターを務めるルート・ハータイ教授のある論文を読んで以降、「ダイナミックネットワークアプローチ」というネットワーク科学と複雑性科学の知見が組み合わせられた手法について関心を強く持ち続けていた。

というのも、人間の知性や能力の発達を探究する際に、それらをダイナミックなシステムとみなすだけでなく、そこからシステムの構成要素間のネットワーク関係を分析していきたいという思いが日増しに強くなっていったからである。こうした探究を行うためには、ネットワーク科学の知見が不可欠なのだ。本格的にネットワーク科学の領域を探究し始めるのは、今年の九月からと予定していたが、そこまで待つのではなく、時間をうまく作りながら、少しずつ独学で探究を進めていこうと思ったのである。

実際に、今日の夕食後から、先日購入した“Network science (2016)”を読み進めることにした。このテキストは、私の好きな出版社の一つであるケンブリッジ大学出版のものである。ケンブリッジ大学出版のテキストは、どれも内容が充実しているという印象を私は持っており、本書も非常に中身が濃い。同時に、本書はアメリカの大学で用いられる象徴的なテキストと言ってもいいような作りになっており、分厚いながらも、イラストを含め、解説が分かりやすくとても充実している。

著者のアルバート・ラズロー・バラバシは、理論物理学者であり、ネットワーク理論の領域において非常に著名な研究者である。本日から、本書の章立てに沿いながら、少しずつネットワーク科学の知見に親しんでいきたい。とにかく、自分の知性発達科学の研究に応用することを目的にしながら本書を読むことが大切であり、知性や能力の構成要素や組織における個人を、ネットワークの構成要素と常に見立てながら、本書の知見を自分の中に取り入れていこうと思う。

発達科学のみならず、時系列データの分析にせよ、ネットワーク科学にせよ、それらをより深く学びたいという思いを抑えることが全くできない。完全に自己制御が効かなくなっていると言ってもいいだろう。もはや自分がどこに向かおうとしているのかも分からなければ、そのようなことを考える必要すら感じなくなってきた。とにかく日々の探究を、発達現象に関する事柄で埋め尽くしたいと思う。2017/3/3

【追記】

なんという偶然だろうか。上記の日記で言及したアルバート・ラズロー・バラバシ教授が設立した、世界で最初のネットワーク科学の博士課程が存在する中央ヨーロッパ大学に、私は今日足を運ぶ。今このようにしてブダペストにいることは非常に不思議であり、それ以上にこの日記を読んでいることも不思議であった。

昨日から不思議な意識状態にあり、どうやら今の私は完全に自己の人生を何か大きなものに委ねているようである。自分の人生が大きな大河として淀みなく流れていく。今日もその流れそのものに他ならない。自分がなぜ今このようにしてブダペストにいるのかは分からないが、私の人生が大きな流れに他ならず、ブダペストで過ごす今日という一日が流れそのものであることだけは分かる。

今日のブダペストは快晴だ。そろそろ朝食を摂りに一階のレストランに向かう時間だ。ブダペスト：
2018/4/18(水)08:25

802. 習慣としてのオランダ語学習について

今朝は五時前に起床し、いつものように毎朝の習慣的实践を行ってから、朝の仕事に取りかかった。毎朝の習慣的实践の中に、オランダ語の学習が定着している。

昨日の夜に浴槽に浸かりながらふと、同じオランダ語コースを履修していたアイルランド人のドーナと先週話をしたことを思い出していた。ドーナも何やら研究やインターンなどで毎日忙しく過ごしているらしく、オランダ語の学習が滞っているとのことである。先日夕食を共にした中国人のシェンも同じようなことを述べていた。オランダで生活をする外国人にとって、オランダ語の学習がなかなか進まない理由は、良かれ悪しかれ、この国で英語が公用語のように通じてしまうことにあるだろう。

もちろん、理由はそれだけではないと思うが、この点は非常に大きいように思う。そうした状況にあっても、ドーナは来学期から、オランダ語の本格的な学習を再開させるそうである。彼女は、現在在籍している言語学修士プログラムが修了したら、しばらくフローニンゲン大学の言語学センターで働くそうだ。もちろん、仕事の大半は英語でなされるのだと思うが、より長期間にわたってこの国で生活するということもあり、腰を据えてオランダ語を学習するつもりらしい。

昨日考えていたのは、第二外国語を真に習得するというのは極めて難しいということだ。日本語で考えるのと同じようにその言語を用いて思考ができるようになるまでには、相当の時間を要する。外国語を用いて思考することに対して徐々に不自由さがなくなってくるためには、四年間ぐらいその言語を集中的に学ぶ必要があると思う。いやむしろ、日本語と同じようにその言語を身体レベルで活用するには、その言語が用いられる国で生活をし、四年以上の時間をかけながらその言語に集中的に浸り続けるということが要求されるように思う。

そのように考えると、オランダでの今の私の生活は、オランダ語に浸り続けているというような状況ではなく、圧倒的に英語が優位に占めている。こうしたことから、私がオランダ語を習得していくことは非常に難解だということを昨日考えていた。

正直なところ、私がオランダにいる間に、現在の自分の英語力と同程度のオランダ語力を獲得できるとは到底思えない。そうであるならば、なぜ私は毎朝オランダ語の学習を少しばかりでも行っているのかが疑問に思えてきたのだ。人間の習慣は非常に強い力を持っており、オランダ語の学習は完全に朝の習慣になっている。正直なところ、オランダ語の学習に関して特に目的はないのだが、ごくごくわずかばかりでも、聞こえる音や分かる意味が増えてくることを実感しているため、この習慣を止めることができないのだと思う。

オランダ語の学習に対して、特に見返りを期待することはなく、その言語が開示する世界がごくわずかばかりでも開けてくることを実感できることだけが、この言語を学習する内発的な動機なのかもしれない。今日も諸々の習慣に沿いながら、自分の仕事に従事していこうと思う。2017/3/4

803. 心理空間の差異化と時間的拡張過程

今日はいつもより早く起床したためか、午前中に随分と多くの仕事に取り掛かることができた。その中でもとりわけ力を入れて取り組んでいたのは、エスター・セレンとリンダ・スミスが執筆した“A Dynamic Systems Approach to the Development of Cognition and Action (1994)”である。

当初の計画では、この書籍を再読するのに数週間ぐらいの時間をかけようと思っていた。しかし、再読を始めてみると、その内容に引き込まれるものがあつたため、一日に一章から二章程度読み続けることを継続させていた。

本日の午前中をもって、この書籍の再読が終わった。正直なところ、この書籍から得られたことだけをもってして、一冊の書籍が書けてしまうぐらいの実りをもたらす読書であった。今後の日記の中で、直接的・間接的に本書から得られた事柄が少しずつ滲み出てくることだろう。本書で得られた知識を発酵させることを焦るのではなく、それが自然な発酵過程を通じて純化されるのをただ見守ることが大切だ。

本書を読み終えて思ったのは、ここからもう一度、カート・レヴィンの仕事を体系的に辿る必要があるということだった。レヴィンの業績は、時に経営組織論や組織行動論の中で散見されることがある。確かに、レヴィンの理論は、組織内の人間心理を説明する優れたモデルである。しかし、発達心理学を学んだ者にとっては、レヴィンがそうした範疇に収まる研究者ではなかったことが分かるはずで

ある。特に、彼が兼ね備えていたダイナミックシステム理論に相通じる視点や発想は注目に値するだろう。80年以上も前に、カート・レヴィンは、現在のダイナミックシステム理論に似たような観点を持っており、そうした視点を通じて人間の発達を捉えていたのである。

セレンとスミスの書籍の中でもレヴィンに関する言及があり、レヴィンが残した代表的な図が掲載されていた。それは、人間の心理空間の質的変容過程を示すものである。それを眺めながら、改めて人間の心理的発達は、差異化と統合化の賜物であり、同時に、時間感覚の変容を伴うものだと思わされた。これはいかなる発達領域にも当てはまるが、私たちの心は発達すればするほど、心が生み出す心理空間が差異化されていく。

そして、差異化のみならず、心理空間そのものが時間的に拡張していくのである。特に心理空間の時間的拡張は、カナダの精神分析家でもあり発達心理学者でもあったエリオット・ジャックスの指摘と相通じるものがある。ジャックスの研究において、認知的発達が進むと、認知を適用できる時間軸が伸びるという調査がある。ジャックスは、とりわけ企業のエグゼクティブの認知的発達を探究しており、エグゼクティブの認知的発達は、経営現象をどれだけの時間軸で見通せるかの能力と密接に関わっていることを明らかにしていたことを思い出す。

心理空間の差異化とその時間的拡張過程という現象は、まだまだ探究の余地のあるテーマだと思えて仕方がない。セレンとスミスの書籍を再読することがひと段落したため、当初はピアジェの全集をじっくりと読み進めようと思っていた。また、ダイナミックシステムアプローチの数式モデルを発達現象に本格的に適用したポール・ヴァン・ギアートの論文の中で、まだ未読のものをとりあえず全て読むという計画を立てていた。ポール・ヴァン・ギアートの仕事を体系的に辿ることはこれからすぐに着手しながらも、ピアジェの全集に関しては少し先延ばしにする必要があるだろう。

というのも、ここでもう一度、手元にあるレヴィンの著書“Principles of Topological Psychology (1936)”、“A Dynamic Theory of Personality: Selected Papers (1935)”、“The Conceptual Representation and the Measurement of Psychological Forces (2013)”、“Field Theory in Social Science (2013)”、“The Complete Social Scientist (1999)”を目を通しておきたいと思ったからである。発達心理学の文脈では、レヴィンの仕事が語られることはほとんどないが、彼が持っていたダイ

ナミックシステム理論に相通じる洞察力を含め、発達現象をより深く理解するためには、彼が残した仕事を決して忘れてはならないと思う。2017/3/4

804. 幼少の頃から: 存在の固有の色と原点

昨日の夜から、ネットワーク科学の探究を少しずつ始めることにした。アルバート・ラズロー・バラバシが執筆した“Network Science (2016)”という書籍は、ネットワーク科学を学ぶ初学者にとって非常に有益だと思う。解説の明瞭性と扱われている論点の網羅性、そして、テキストのビジュアルも含めて、独学でネットワーク科学を学ぶための格好の手引書だと思われる。

昨夜、この書籍に取り掛かっていると、どうやら今の私の中で、人間の知性や能力が発達する現象を「システム」という観点と「ネットワーク」という観点から探究したいという思いが非常に強いことが分かった。そうした思いを抑えることは難しく、ノートに「system science & network science!!!」という言葉を書き殴っていた。そのセンテンス自体には全く意味もないのだが、それを書くことによって、改めて自分がシステムとネットワークに関心を持っていることが分かったし、何より、探究衝動のようなものを少し柔らげて就寝に向かうことができた。

フローニンゲン大学での一年目の探究生活において、特に力を入れてきたのは、まさにダイナミックシステムとして人間の発達現象を捉えることであった。そして、二年目においてもこの探究を継続させながらも、今度はダイナミックネットワークとして人間の発達現象を捉えたいと強く思う。そのようなことを再度自分の中で確認していると、ふと幼少の頃のことを思い出した。日本のサッカー界にプロリーグが誕生した時、私は小学校二年生だったと思う。

ある日、ある生命保険会社から、カレンダーと共に選手のプロフィール情報が掲載された小冊子が我が家に届けられたことを覚えている。私は、実際の試合を観戦するよりも、その小冊子に掲載されている選手のプロフィール情報を全て頭に入れることに強い関心があった。今でも鮮明に覚えているのは、選手に関する情報を全て頭に入れてからでなければ、試合など見てもしょうがない、という思いが私の中にあっただことだ。そして実際に、プロフィール情報を全て自分の頭に入れるために、それからは毎朝登校前に早く起き、手書きで選手のプロフィール情報を書き写していたのを思い出した。

一見すると意味がないように思われる、選手の生年月日や身長体重、そして出身校などを無心の状態でひたすらに書き写していた。あの時の私はなぜそのようなことをしていたのだろうか。そうした記憶から、さらに翌年の出来事が自然と思い出された。小学校三年生の時の私は、生き物に強い関心を持っていた。小学校二年生の時に、東京から山口県に引っ越してきて初めて、野良犬やトンビ、そして蛇などを目撃することになった。

そうした生活環境の変化が契機となり、生き物に対する関心が私の中で芽生えたように思う。当時の私は、貯まったお小遣いを使って、近所の小さな書店で売られている昆虫図鑑と恐竜図鑑を少しずつ購入していくことが楽しみであった。なぜか購入した都度、それらの図鑑を学校に持って行き、理科の時間に生物の話が取り上げられると図鑑を広げていたことを思い出す。授業中に教科書とは関係のない図鑑を広げている私に対して、担任の先生は注意することなく、図鑑に何と書いてあるのかを私に尋ねてきたことを今でも鮮明に覚えている。

学校に持って行った図鑑は全て、自宅に持ち帰ることをせず、机の引き出しやロッカーの中に置きっぱなしにしておく癖があった。そうしたこともあり、夏休み前の最後の登校日を迎える日には、それらの図鑑は膨大な量になり、一人で持って帰ることが決してできないことに気づいたのを覚えている。

とても親切な友人二人と一緒に図鑑を持って帰ってくると述べてくれたので、図鑑でいっぱいになった手提げ袋を両手に抱えながら、私たち三人が学校を後にしたあの夏を思い出す。幼少期のそうした行動は、今になって思うと、その理由が少し分かるような気がする。今も変わらない何かがあつたのだ。それは年を重ねるごとに忘れ去られてしまうような感覚や感情を含んだものであるのと同時に、それは決して忘れてはならないものでもあるということに、今となってようやく気づく。

サッカー選手のプロフィール情報を全て頭に入れようと早起きをしていた幼少時代の私と今の私は、何ら変わることがないように思えて仕方ない。事実、あの時、鉛筆で真っ白なノートにただひたすらに選手の情報を書き写していた行動と今の日々の私の行動は何ら変わることがないどころか、当時の嬉々とした感情と全く同様の感情が自分の内側で流れているのである。同様に、図鑑を購入し、図鑑の一ページ一ページをめくる行為の最中で感じていた感覚と、今の私の日々の探究活動から

もたらされる感覚は同じ色を持っている。その色は決して私の内側から消えることなく、私が再びその色に気づくのを辛抱強く待っていてくれたようなのだ。

これこそが私の探究を根元から支えるものであり、私という存在が持つ固有の色なのだろう。私は再び原点に帰ることができたような気がしている。原点に帰ることは、原点を中心に、再び大きな円弧を描く運動を引き起こす。自分独自の色や原点というのは、常に私たちのそばにあり、絶えず認識の光が当てられることを待っているような気がするのだ。2017/3/4

【追記】

ブダペストの旅先でこれと同じような体験をしていた。昨日、宿泊先のホテルの近くにある大きな公園を訪れた時、幼少時代の諸々の記憶が蘇ってきた。それらはどれも自分の個性に関するものであり、結局私はあの時に育まれた個性と共に今を生きていることに気づかされたのである。「思い出すことは深めることなのかもしれない」そんなことをふと思った。自分自身について思い出すことが、自己及び人生そのものを深めていくのではないだろうか。ブダペストの街はそのようなことを私にそつと教えてくれた。ブダペスト:2018/4/18(水)08:44

805. 知人の送別会へ向けて:ワインとチーズについて

午前中の仕事を終え、フローニンゲンの街の中心部に買い物に出かけた。明日は、京都大学から交換留学で来た友人の送別会を開催することになっており、飲み物と食材の買い出しに出かけた。私は普段アルコールを一切飲まないのだが、一年間に特別な日だけはお酒を少々飲むようにしている。明日はそのような日にしたいと思っていたため、街の中心部にあるワイン専門店でワインを購入した。

カリフォルニアで暮らしていた頃は、週末のどちらか一日にワインを飲むような生活を送っていたことをふと思い出した。その時には、ワインの奥深さに触れ、真剣にワインについて学びたいと思い、ソムリエの資格の取得に向けて勉強をしたいと思っていた。そうしたこともあり、最低限のブドウ品種については知識があったのだが、今日はこれまで気に止めたことのないブドウ品種を発見した。これまでイタリア産のワインに縁がなかったため、イタリアを代表するブドウ品種である「キャンティ」という存在を今日初めて知ることになった。

これは初めて私の意識に上がったブドウ品種であるため、とても興味深く思い、この品種が用いられたワインをまず購入することに決めた。そして、もう一本は、店に入る前から購入を決めていた「シラーズ」というブドウ品種のワインにした。シラーズというブドウ品種は、カリフォルニア時代の私のお気に入りのものであり、とてもスパイシーで力強さがある。店内でどのシラーズにしようかと悩んでいたところ、店に置かれているものをよくよく眺めてみると、「シラーズ (Shiraz)」ではなく、「シラー (Syrah)」という表記のものが多かった。

親切に声をかけてくれた店員に両者の違いについて聞いてみると、どうやら両者は同じブドウ品種なのだが、原産国が異なるようである。フランスやカリフォルニアで栽培されたものが「シラー」と呼ばれ、オーストラリアで栽培されたものが「シラーズ」と呼ばれるとのことである。私がカリフォルニアにいた時によく飲んでしたのは、シラーズであったため、私は現地のカリフォルニアのものではなく、オーストラリアのものをよく飲んでいて今になって気付かされた。実際のところ、特にロサンゼルスで生活を始めてからは、ワインのブドウ品種というよりもその製法にこだわっていた。

その初期には、オーガニックワインだけしか飲まないようにしていたり、ワインの保存料として使われる硫黄が入っていないワインだけしか飲まないような時期があった。そこからは、哲学者かつ教育学者でもあったルドルフ・シュタイナーが開発したバイオダイナミック農法で作られたワインしか飲まないようにしていた。これは入手が困難であり、高価なものであったが、自然や天体との深い一体化を感じるための儀式的な意味合いを持たせて週末に少しずつ飲んでいて懐かしい。

今日購入したワインはどちらもオーガニックワインであり、両者のラベルには「bio」の表示があるが、それらは価格的にも、バイオダイナミック農法で作られたものではなく、フランス語とイタリア語において「有機的」という意味の“biologique”と“biologico”を示すものだろう。

ワイン専門店を後にし、行きつけのチーズ屋で、オーガニックチーズの一年発酵ものを購入した。これも有機栽培によって作られたものであり、私のお気に入りだ。明日の送別会が今から楽しみである。2017/3/4

昨夜は十分な睡眠を取ったため、今日は起床直後からとても気力が満ちている。起床直前の夢の中で、複雑性科学に関する一つの問題について新たな発見があったのだが、残念ながらそれを思い出すことができない。いずれにせよ、昨日も複雑性科学を中心に、自分の仕事を着実に進めることができていた。複雑性科学に加えて、ネットワーク科学に関する探究も少しずつであるが軌道に乗り始めている。

昨日は、午後の仕事がひと段落ついたところで、ネットワーク科学の代表的な研究者であるアルバート・ラズロー・バラバシが出演するドキュメンタリー番組を視聴していた。この番組を視聴しながら、人間の知性や能力が発達するプロセスやメカニズムをネットワーク科学の観点から探究していくことは、やはり強く私を惹きつけると改めて感じた。

今のところ、ダイナミックシステム理論の観点を用いた人間発達に関する研究は非常に進んでいるが、ネットワーク理論の観点を適用した人間発達の研究はほとんど見かけない。ネットワーク科学と発達科学を架橋した領域はほとんど手付かずであるが、逆にそれは探究しがいのあることだと思う。ダイナミックシステムアプローチや非線形ダイナミクスと同様に、ネットワーク科学の理論と研究手法は、非常に優れたものが多いため、発達研究に応用させる範囲がとても広いと私は見ている。

ちょうど昨日、ネットワーク科学の諸々の手法がプログラミング言語のRを用いて適用することができることが分かったため、専門書を一冊ほど購入した。現在、毎朝取り組んでいる“Network Science (2016)”を読み終えたら、そちらの専門書を読み始めたいと思う。

昨日は、午後に少しばかり時間を取り、過去の日記を加筆・編集するという作業を行っていた。その中でも、かれこれ半年前に書き留めた日記に対して、新たな発見があった。その記事は、偶然ながら私の誕生日に書いたものである。「473. 発達的大変動」という記事を読み返してみると、当時の私が発達現象の直前に起こる予兆のようなものを感じ取っていたことが分かった。

一昨日に読んでいた論文にあるように、私たちの発達の原理の一つは、システム内のエントロピーが増大し、それが極限にまで至った時に新たな構造を生み出し、エントロピーがまだ減少していくということにある。当時の私は、自分の意識空間の中において、エントロピーの増大を感じ取っていた

ようなのだ。また、それが臨界点に向かう一部始終を目撃していたようであるし、不安定性の極致を迎えた瞬間を捉えていたようなのだ。

さらに、その日以降の日記を読んでも、自己システムのエントロピーが減少していくかのように、自分の内側で起こった現象が落ち着いていく様子も捉えていたことが分かる。半年前に体験した事柄を言葉の形で記録しておいたおかげで、一昨日に読んだ論文の内容を体験的に裏付けることができたのである。今後も自分の体験を通して、自己システムの発達過程におけるエントロピーの度合いの推移とシステムの安定性・不安定性、そして、システム内に新たな構造が出現するという自己組織化現象の観察を続けたいと思う。2017/3/5

807. ブダペストでの探究活動の可能性

今日は夕方から、京都大学から来た日本人留学生の送別会があるため、午前中に集中的に仕事を進めていた。その一つとして、ネットワーク科学の専門書を読んでいた。これは以前紹介した、ネットワーク科学の代表的な研究者であるアルバート・ラズロー・バラバシが執筆した“Network Science (2016)”というテキストである。今このテキストを毎朝少しずつ読み進める過程で、ダイナミックシステム理論に遭遇した時と同じような感覚に包まれている。

ネットワーク科学は間違いなく、人間の知性や能力の発達研究に多大な貢献を果たすということが直感的に分かる。ただし、いかんせんこの領域に関する専門知識が不十分なため、実際の研究の中にネットワーク理論や諸々の手法をどのように活用していくのかについて、具体的な考えはこれから詰めていく必要があるだろう。今はそうした具体的な活用方法などはさほど重要ではなく、とにかく、ダイナミックネットワークとして私たちの知性や能力を捉えることは、それらをダイナミックシステムとして捉えることと同様に重要であるという確信がある。

もちろん、今の私が時間とエネルギーを優先的に当てる必要があるのは、システム科学(一般システム理論からダイナミックシステム理論までを含む領域)に関する探究を進めていくことである。これを蔑ろにしてはいけない。システム科学の探究に並行させる形で、少しずつ焦らずネットワーク科学の探究を進めていきたい。バラバシのテキストを読みながら、システムとネットワークというのは密接

に関係している概念であり、実際の現実世界においても、ありとあらゆるところでシステムとネットワークが関係していることが分かる。

純粋な学術研究のみならず、実用面においても、システム科学とネットワーク科学は、現代社会において非常に重要な分野なのだと思う。午前中にバラバシのテキストの第一章を読んだ時、彼が研究を始めた当初、ほとんどの科学者がネットワーク科学の有用性に気付いていなかったことが伺える。実際に、「ネットワーク科学」という言葉が誕生したのも、この10年以内のことだと知った。私が感銘を受けたのは、専門としていた物理学を離れ、自分の純粋な関心と情熱に従ってネットワークの研究に乗り出したバラバシの姿である。

特に、何年もの間、科学コミュニティから相手にされず、主要な科学ジャーナルに論文を投稿するものの、常にリジェクトされながらも、最終的には、最も権威のある科学ジャーナルであるNatureとScienceに論文が掲載された一連のストーリーには、私の心を掴むものがあつた。個人的に、彼のような熱感を持った研究者を私は好む傾向にある。同時に、逆境を乗り越えながら彼が残してきた功績は、尊敬に値すると心から思う。

バラバシのストーリーを読み、このテキストの中身に入っていけばいくほど、ネットワーク科学の世界に引き込まれそうになっている。このテキストでも触れられているが、ネットワーク科学を専門とした博士課程のある大学院は、現在、世界に二つほどある。一つは、ボストンにあるノースイースタン大学である。そしてもう一つは、ネットワーク科学の博士課程を世界で最初に設立した、ハンガリーの中央ヨーロッパ大学である。

ここは、実際にバラバシがプログラム長を務めている大学だそうだ。このテキストを全て通読し、ネットワーク科学が発達研究に対して具体的にどのような応用可能性を秘めているのかが分かり始めたら、本格的にネットワーク科学の探究を始めるかもしれない。その時にはもしかしたら、私はブダペストにある中央ヨーロッパ大学で学びを得ている可能性もあるだろう。2017/3/5

【追記】

今日私は実際に中央ヨーロッパ大学を訪れる。上記の日記が執筆されてから一年ほどの時が経つ。今このようにしてブダペストにいること、そして中央ヨーロッパ大学に訪問することが持つ深層的な

意味について考えさせられる。今日は単に大学を見学するだけだが、いつか私はここでネットワーク科学に関する探究を本当に行っているかもしれない。その日が本当にやってくるかどうかは今の私には分からない。ただし、私の日記だけがそれを知っている。ブダペスト:2018/4/18(水)08:58

808. 外国人に対するオランダの各種補助制度と欧州での永住権について

昨日知人から、オランダの住宅補助制度について話を聞いた。オランダには、社会的な地位などに応じて、住宅手当のようなものが支給される制度があるようなのだ。この制度は、例えば、低所得者や障害者だけではなく、私のような留学生にも適用されるそうだ。家賃の金額や住宅の面積に応じて、住宅手当の金額が算出され、オランダ政府への申請後、無事に承諾されれば、その金額が自動的に銀行口座に振り込まれるようになるそうだ。

これは、留学生にとっては非常に有り難い補助だと思う。もう少し調べてみると、今の私が住んでいる住宅の家賃は、補助対象の上限を超えていたため、残念ながらこの制度の恩恵を私が授かることはできなさそうだ。しかし、その他にも色々調べてみると、住宅手当以外にも、子育て手当や保険手当などが留学生に支給されることを発見した。オランダ政府のウェブサイトを通じて、各種個人情報を記入してみると、今の私が置かれている状況において、保険手当であれば月々支給されることがわかった。

金額はわずかであっても、こうした補助があるというのは、海外で生活をする者にとって非常に有り難いと思う。こうしたオランダ政府からの補助制度以外にも、その知人の方から、欧州でグリーンカードを取得する方法についても話を聞いた。米国に在住していた時、米国でグリーンカードを取得するのはなかなか条件が厳しいと感じていたことを思い出した。一方、欧州でグリーンカードを取得することに関しては、その方の話を元にすれば、それほど条件が厳しいものではないと思ったのだ。

その条件としては、名称は忘れたが、ある協定に加盟している欧州の一国に連続して五年間滞在すれば、その国に永住することが許可されるのみならず、その協定国内で永住する権利が得られるとのことである。今のところオランダに五年間滞在する予定はなく、また今後も欧州の一国に五年間留まるような計画はないため、あまり欧州のグリーンカードを取得することに強い関心はないが、そのような制度があるということを知っておくのは、将来のことを考えると有益であった。

改めて、こうした制度的なものに関して、自分は大変疎いことに気づかされた。だが、今回の一件で、オランダが外国人に提供する補助制度や欧州における永住権獲得に関してアンテナが広がったのは間違いない。2017/3/6

809. オランダでの家の購入について

今日は昼食後、フローニンゲンに来てからずっとお世話になっている美容師のロダニムに髪を切ってもらった。職業柄か、ロダニムはとても人当たりが良く、彼との世間話は何かと面白い。特にオランダの文化や制度について質問をすると、いつも新たな発見を私にもたらしてくれる。

昨日、知人からオランダの住宅手当の制度について教えてもらったことを書き留めていたように思う。全く意図的ではないのだが、今日のロダニムとの世間話の中で、偶然にもオランダの住宅事情、特に不動産の賃貸と購入の話になった。実は私が毎月支払っている家賃は、オランダ人の学生の年間の授業料とそれほど変わりはない。

オランダ政府は高等教育に手厚い支援を行っているため、オランダ人の学生が支払う大学の授業料は極めて良心的だと言える。一方、EU圏以外から来た留学生は、オランダ人やEU圏内の学生が支払う授業料の10倍ほどの授業料を大学に納めている。とはいえ、それでも私のような非EU圏から来た留学生が支払う大学院の授業料は、米国のそれに比べると格段に安い。話が少し脇にそれたが、毎月にそれぐらいの家賃を支払うぐらいなら、フローニンゲンの街の中心部に持ち家を購入することをロダニムから勧められた。

せいぜいフローニンゲンに後数年ほどしか滞在しないことを考えると、家を購入するというのはあまり賢くない行動であるとはわかってはいたが、ロダニムにあれこれオランダの住宅事情について聞いてみると、面白いことが分かった。そもそも、私のような外国人でも、例えば、フローニンゲン大学の博士課程に進学し、安定的な給料が大学から支払われることになれば、銀行から比較的簡単に融資を得ることができ、自宅を購入できるそうだ。

また、フローニンゲン大学から給料が支払われるというように、オランダ国内で所得を得るのではなく、例えば、日本での自分の事業から安定的な収入が得られているのであれば、それを証明する書類を銀行に提出すれば、同様に融資が受けられるそうだ。

フローニンゲンの街に今後何十年もいるわけでもないことをロダニムに伝えたところ、仮に数年間でも今後この街にいれば、やはり住居を購入するべきだと勧められた。というのも、ロダニム曰く、購入した物件を売ることは非常に簡単であり、何より、購入時よりも間違いなく高く売却できるような仕組みがあるそうなのだ。実際にロダニムも、数年前に家を購入しており、今は売ることを考えていないが、安定的な収入があるのであれば、オランダで家を賃貸することは馬鹿げており、投資目的としても家を購入することが賢い選択だということを知った。

自宅に帰ってから、少しばかり自分でも調べてみたところ、外国人がオランダで家を購入することには特に何も制限がないことが分かった。また、オランダ人の6割以上が持ち家を持っているというデータにも少し驚いた。オランダの不動産市場に関するデータを眺めてみても、ロダニムの言うように、確かに数年前よりも今の方が住宅を購入しやすくなっていることが分かった。

とはいえ、結局のところ、私はせいぜい後一年か二年でまた別の国で生活を開始することになるであろうから、当面はオランダで家を購入することはないだろう。ただし、仮にフローニンゲン大学から雇われる形で博士課程に進学することになれば、少なくともさらに四年以上はこの街で生活することになるため、その時は家の購入を検討しようと思う。2017/3/6

810. 歩き続ける姿とその軌跡を見守って

昨日は午前中にネットワーク科学の専門書を読んでおり、この領域の概念や理論、そして研究方法が、人間の知性や能力の発達研究にどのように応用できるのかを考えていた。少しずつではあるが、応用の形に関する輪郭ができてつつある。今はまだそのような段階だ。しかし、ダイナミックシステムアプローチや非線形性ダイナミクスを代表とした複雑性科学が発達科学と密接に結びついたように、仮にネットワーク科学にもそのような可能性を秘めていることがより明確になれば、本格的にこの領域の専門性を高めたいと思う。

本格的にというのは、この領域に関する博士号を取得することを意味しており、その選択肢が最近になって頭の中にある。ネットワーク科学の領域を牽引するアルバート・ラズロー・バラバシがプログラムに参与しているブタペストの中央ヨーロッパ大学かボストンにあるノースイースタン大学が提供している博士課程が候補である。この道については、今はそれほど真剣に検討しているわけではな

いが、仮にネットワーク科学に関する博士号を取得するのであれば、世界で最初にネットワーク科学の博士課程を設立したブダペストの中央ヨーロッパ大学を私は選ぶであろう。

私はこれまでアメリカで生活をし、現在は西ヨーロッパで生活をしているため、中央ヨーロッパがどのようなものなのかを掴むために、ハンガリーという国で生活することへの関心は高い。未だヨーロッパなるものの輪郭すらも掴めていないため、欧州により長く留まっておきたいという思いもある。

昨夜は衝動的に、自分の今後の道について、現在思い描いている歩みをノートに書き留めていた。興味深いことに、大枠はこれまでと変わらないのだが、数年前に自分が思い描いていたものと比べると、細かな点で若干の相違がある。そして、こうした計画すらもほぼ無意味であるかのような出来事がいつも私を襲うことを知っており、実際に私が行く意思決定も、自分が思い描いていた道とは異なるものであることが多い。自分が思い描く道を歩けるかどうかには囚われることなく、私はただ今の自分が望む仕事を愚直に継続させていきたい。

その結果として、開かれるものや閉じられるものがあることは、一人の人間の人生においてごく自然なことだと思うのだ。何が開かれ、何が閉じられるのかは、今の私には見えないことである。ただし、今の私に常に見えているのは、歩き続ける自分の姿だ。歩き続ける自分の姿とその軌跡だけを自分は見守っていたいと強く思う。2017/3/7

811. 内側の声に従って生きる道を歩むこと

今日は、午前中にネットワーク科学と非時系列データ分析に関する専門書を読んでいた。数日前から引き続き、アルバート・ラズロー・バラバシが執筆した“Network Science (2016)”を毎日一つか二つの章を読み進めている。今回は一読目であるため、細かな論点に深入りすることなく、主要論点をまずは感覚的に把握するような読み方をしている。非時系列データ分析に関する専門書“Nonlinear Time Series Analysis (2000)”に関しても、ほとんど同じような進め方と読み方を採用している。どちらも偶然ながらケンブリッジ大学出版のものであり、やはりこの出版社から刊行される専門書は質が高いものばかりだとつくづく思われる。ケンブリッジ大学出版は、お気に入りの出版社の一つだ。

実際のところ、数日前から読み進めているどちらの書籍も、今の研究に直接的に関係するわけではない。特に、前者のネットワーク科学に関しては、現在進めている研究との接点はほとんどないと言ってもいいだろう。ただし、私の中で、システムの観点とネットワークの観点から人間発達を捉えていくという課題意識が強く芽生え始めているため、ネットワーク科学に関する理解を少しずつ深めていくことも大切なことだと考えている。

また、後者の書籍に関しては、現在私が活用している非線形ダイナミクス的手法に直接関係するような理論を解説している箇所もあれば、そうでない箇所もある。今の研究をまずは完成させることを最優先させるのであれば、この専門書に関しては、現在の研究に直接関係のある箇所を中心に読み進めた方がいいのかもしれないと思直している。やはり自分の研究に直接関係する内容の方が、確実に自分の身体知になっていくであろうから、研究で取り上げる概念や手法と関係した箇所を丹念に読み進めるということを行った方が良さだろう。

ネットワーク科学の探究に関しては、幅を広げるような読み方をする一方で、システム科学の探究に関しては、自分の研究に関係する箇所を丹念に読むという深さを重視する読み方を心がけようと思う。午前中はそのような読書を行い、昼食前にランニングに出かけた。

先々週、先週、今週と天候が悪い日がずっと続いている。そうした中、今日は曇り空であったため、なんとか走りに出かけることができた。ランニングに出かけて気分転換を図ることができたと思っていたのだが、今日はあまり気分が冴えていないことに昼食後に気づいた。気分というよりも、内側のエネルギー循環が良くないという表現か、エネルギーの絶対量が減退しているという表現が妥当だろう。

午後からも午前中に引き続き、専門書を読み進めていこうと思ったが、うまく進まなかった。そのため、フローニンゲン大学の二年目に在籍する予定の「実証的教育学」のプログラムに応募する書類を準備していた。推薦状の下書きを済ませ、推薦状を書いてくれることに快諾してくれた論文アドバイザーのサスキア・クネン教授とメンターのルート・ハータイ教授に下書きを送った。その後、その他の細々とした仕事を済ませることができたが、相変わらず専門書を読むような気分にはなれなかった。

そうした中、フローニンゲンという街に二年留まるのか、三年留まるのかという問題について、昨日と同様に考えを巡らせていた。今の自分は、何かに対して焦っているようで焦っていない。あるいは、焦らなければならないが焦る必要がない、という幾分奇妙な思いに少しばかり板挟みになっている。焦っている自分や焦らなければならないと思っている自分は、小さな自己から生まれた超克されるべき存在である。

一方で、焦っていない自分や焦る必要がないと思っている自分は、大切なことを知っている存在だ。社会的な通念に左右される小さな自己は、徐々に私の中でその存在を小さくしているが、まだ時折私の内側で顔を覗かせる。そういう時は決まって、自分の気分がすぐれない。真に自分の内側の声に従いながら生きることの道は、思っていたよりも遠いものだとつくづく思われる。2017/3/7

812. 問題解決と発達

今朝は起床直後に、幻想的な景色を書斎の窓から見た。フローニンゲンの街も徐々に春に近づいてきたためか、朝日が昇る時間が早くなってきている。太陽が早朝の闇から抜け出ることを知らせるかのよう、辺り一面が薄赤紫色に照らされた。このような光景はこちらに来て初めて目撃したように思う。書斎の窓から見える赤レンガの家々でさえも、辺りを包む薄赤紫色に溶け込んでしまうようだった。その光景を目撃した時、私はなぜだか日本の春を思い出した。

おそらく、日本に春がやってくるのもあと少しだろう。書斎の窓から見えた薄赤紫色の景色は、満開の桜を彷彿させた。この幻想的な景色は、あっという間に過ぎ去っていった。だが、その光景が私にもたらした余韻は、私の内側に依然として強く残っている。それは日本の春を思い起こさせるものであったがゆえに、この余韻は消えることなく私の内側に留まり続けるかもしれない。そのような光景を早朝に目撃することができて、とても嬉しく思う。

昨日は午後から、仕事の調子があまりすぐれなかったが、夕食後から再びその勢いを取り戻したことが記憶に新しい。普段であれば、睡眠前の一時間から一時間半を仕事以外の自由時間に充てるのだが、昨夜はそうしなかった。というのも、「状態空間分析」を行うための特殊なソフトウェアのファイルをようやく適切に作成することができ、ソフトウェアが突如としてうまく機能したからだ。実は、先週もこのソフトウェアを活用するために、研究データを適切なファイルフォーマットに変換しようとして

いた。しかし、その時は変換がうまくいかず、ソフトウェアが起動することなく、非常に苦戦していた。結果として、このソフトウェアを研究に駆使しているカナダ人のナオミ・デ・ライター教授にメールをし、一度データのファイル形式を確認してもらいミーティングを依頼していたのだ。

幸運にも、昨夜試行錯誤をしながらファイル変換を模索していたところ、一挙にこの問題を解決することができたため、今日中にデ・ライター教授にお礼と共に、ミーティングのキャンセルをしておく必要がある。この一件を通じて、改めて問題が解決されることの不思議さを実感した。先週あれこれと試行錯誤をした時には問題が解決されず、しばらく時間を置いて改めて問題に当たってみると、突如としてその問題を解決できたのだ。

この裏には、問題と離れている間においても、私の中で、問題を解決する方法を無意識的に模索していたような現象が継続していたのかもしれない。これは知識体系にせよ、技術体系にせよ、発達現象の肝を象徴するようなことだと思う。つまり、問題が解決することにせよ、発達が起こることにせよ、そこには必ず時間にさらされた熟成期間が必要なのだ。対象に真剣に向き合えば向き合うほど、その瞬間には問題の解決や発達が起こらなかったとしても、水面下ではそれが解決に向かう方向や発達の方向に向かっている。

そして、問題が解決される瞬間にせよ、発達が起こる瞬間にせよ、それは非連続的であり、突発的なものである。今回の一件は、そのようなことを改めて私に教えてくれる象徴的な出来事だった。

2017/3/8

813. 書くこと・考えること・学ぶこと

昨夜と同様に、今朝は午前中から、研究データに対して状態空間分析を適用していた。状態空間分析を行うためのソフトウェアは、「State Space Grids (SSG)」と呼ばれるものであり、この十年以内において、いくつかの論文がこの手法を用いて発達研究を取り扱っている。

このソフトウェアは、元来、マーク・レヴィスとイサベル・グラニックという発達科学者が共同開発したものである。イサベル・グラニックは、マーク・レヴィスの妻でもあり、なおかつ、私の論文アドバイザーのサスキア・クネン先生とも親交が深い。そのため、彼女と一度も会ったことがないにもかかわらず、グラニック教授はどこか近い存在のような気がするのだ。また、グラニックは、親子間のインタラク

ションに対して、このソフトウェアを始めて適用した研究を行ったことでも知られている。レヴィスとグラニックは、ダイナミックシステムアプローチを発達研究に活用した重鎮のような存在であり、もう少し若手の研究者であれば、トム・ホルンシュタインというカナダのクイーンズ大学に在籍している教授が、状態空間分析を活用した研究で有名である。

数年前になるが、まだポール・ヴァン・ギアート教授がフローニンゲン大学から正式に退職する前に、ホルンシュタインを含め、状態空間分析を発達研究に適用することを専門とした研究者をフローニンゲン大学に招いて、ワークショップを開催したことがあるという話をクネン先生から聞いたことがある。そのため、ホルンシュタイン教授とも面識はないのだが、とても近い感じがするから不思議である。ある研究者が近い存在と覚えることは以外と重要であり、そうした親近感には彼らの研究論文により深く入っていくことを可能にしてくれる——同時に、盲点を生み出すかもしれないが——。

これは、ある書籍の著者と面識がある場合に起こるような現象に似ているかもしれない。ある書籍の著者と面識がある場合、その著者が執筆した書籍に関する理解がより深まる経験をしたことはないだろうか。そうしたことが象徴するように、論文や書籍の執筆者に対する親近感のようなものは、その内容理解を助けるような働きがあるのだ。

しばらくSSGを研究データに適用したところで、ホルンシュタインが執筆した“State Space Grids: Depicting Dynamics Across Development (2013)”という書籍に目を通した。この専門書は、状態空間分析に関する説明が豊富であり、ソフトウェアの使い方についても非常に丁寧に解説しているため、SSGを活用した研究を行う際には必須の文献だと思う。

この書籍を参考にしながら、研究論文の“Method”の章を書き進めていた。いつものように、慎重に語彙を選択しながら、簡潔かつ明瞭な文章を執筆していく作業はやはり楽しい。「楽しい」という感情表現は少し稚拙な印象を与えるが、学術論文の中で文章を少しずつ執筆していく作業は、純粋に楽しさの感情を私にもたらす。午前中の執筆作業において、結局それほどの分量を書き上げることはできなかったのだが、それでも着実に論文が一步前に進んだことは確かだ。

昨夜突如として立てた誓いがある。それは大袈裟なものでは決してなく、日本語で何かしらの日記を毎日書き留め、英語で学術論文の一部を毎日何かしら執筆するということである。とても小さな誓

いなのだが、それは私にとって非常に重要なものに思えた。昨夜、ノートに書き殴るようにして立てたこの誓いは、書くこと・考えること・学ぶことが決して切り離せないものであるという私の考えを象徴しているかのようであった。2017/3/8

【追記】

幸運にもトム・ホルンシュタイン教授と昨年の春頃に会うことができた。ちょうどフローニンゲンを中心街で発達科学に関する研究会が開催された時に、ホルンシュタイン教授が招待されていた。ホルンシュタイン教授はとても気さくな方であり、非常に親しみやすかったのを覚えている。偶然にも、今年の六月にアムステルダムで行われる国際ジャン・ピアジェ学会にもホルンシュタイン教授は招待されており、そこでまた教授と再会することになるだろう。自分の人生において人との縁が不思議なように織り成されていく。ブダペスト:2018/4/18(水)10:16

814. 60年後のその日に向かって

今日の午後に、大学の図書館で論文をコピーしている最中に、やはりフローニンゲンには少なくとも三年間留まっておきたいという思いが噴出した。この計画は、以前から可能性として残していた程度のものであったのだが、先ほどの図書館内での一件以降、実現可能性の高いものとして浮上してきた。当初は、フローニンゲン大学で二年間ほど研究をしてから、米国に戻る予定であった。

もしくは、最近新たな選択肢として浮上してきたように、ハンガリーのブダペストで三年間ほど研究活動に従事しようと考えていた。だが、そうした計画を押しつけるような勢いで、フローニンゲン大学に三年間は留まっておきたいという思いが噴き上げてきたのだ。端的に述べると、フローニンゲン大学での学びはこれまでの人生の中で最も重要なものであり、そうした感覚をこの七ヶ月間常に持ち続けている。仮に、人間の推測能力の妥当性がいかに乏しいものであったとしても、学びで張りつめられたこの感覚は、少なく見積もっても、後二年半はその強度を失うことはないであろう、と私は確信している。

そうした確信もあって、フローニンゲン大学には合計で三年間ほど滞在したいと思うようになったのだ。米国の大学院と同様に、大学院卒業後には、一年間ほどその国に滞在できる制度がオランダにもあることを先日知人から聞いた。そうした制度があるのであれば、何も焦って米国に再び戻るの

ではなく、もう一年間ほどオランダに滞在するのも悪くはないのではないか、と思ったのだ。それ以上に重要な理由は、フローニンゲン大学での最後の年は、今のような生半可な量の文章を書くのではなく、ひたすらに文章を毎日書き続けるためだけに捧げる一年にしたいと思っている。

これはもちろん、今お世話になっている教授陣と協働して、質の伴った学術論文をできる多く執筆することを意味する。実際には、今年の五月に修士論文の執筆が完了したところを出発地点とし、修士論文の内容をもとに、少なくとも三本の査読付き論文を複数の教授と共著論文の形でジャーナルに投稿する計画を立てている。

一言で述べると、まだ私は研究者としての仕事を何もしてない。今はただひたすらに修練の時なのだ。文字どおり、自分の生命が枯れるその瞬間まで文章を書き続けるために、土壌を耕し続けているのが今の私の姿である。同時に、学術論文というものを執筆したいという圧倒的な欲求のようなものが、自分の内側に芽生えているのを実感しているのも確かである。だが、これはもはや欲求と呼べるような代物ではないだろう。

というのも、もはやその感情の帰属が自分にあるとは全く思えないからである。実際に、文章を書き続けることによって、自分という存在を根本から溶解させたいとすら思っているのだ。文章を書き続けるという行為の果てに、自己が完全に解体されることがあつたとしても、それを全く厭わないし、それこそが私の望む姿だと言える。さらには、フローニンゲンでの最後の年は、今のような僅かな分量の日記を日本語で書くことを自分に許しはしないだろう。このような微小な投入量では何も始まらない。自分の日記の分量を見返すにつれ、私が普段の生活の中で、いかに日本語を用いて思考をしていないのかを痛感させられる。

現在、英語で執筆する自分の学術論文が、科学者のコミュニティの中でようやく恥をかかない次元のものになりつつあるが、それを支えるのは、やはり母国語運搬能力であるように思える。ここからさらに書き言葉における英語運搬能力を引き上げるためには、どうしても母国語運搬能力を同時に高めていく必要があるのだ。しかし残念ながら、私は日本語で学術論文を書く訓練を受けたことがなく、日本語で論文を書く機会がないため、その代わりとして、日記で自分の考えを何かしら日本語で書き留めたいと思っている。だが、今の量の日記の分量を見るにつけ、日本語運搬能力が高まっているのかどうかを疑問に思ってしまう自分がいる。

こうした甘えは、これまでの人生のいついかなる時にも自分に付きまとっていた。こうした甘えを一刻も早く払拭したい。こうした甘えを払拭できた時、文章を書くという行為を通じて人生を終えることができるような気がするのだ。そうしたことの序章が、フローニンゲンでの三年目の生活と同時に開始されるのではないかという予感がしている。

文章を書くという行為を通じて人生を終えることができるという確証が得られたら、私は一刻も早く日本に帰りたいと思う。人生において何が起こるか分からないが、日本で再び生活を送ることができる日は、短く見積もっても、50年か60年先のことになるだろう。その日に向かって、私はひたすら歩き続けたい。2017/3/8

【追記】

今から一年前のこの日に書かれたことが本当に実現した。フローニンゲンで二年間ほど探究生活を送ってからすぐに米国に戻るのではなく、本当に三年目の生活を迎えることになった。この日記で書かれているように、焦って米国に戻る必要などなかったのだ。これまで毎日日記を少しばかり書き留めてきたが、それをより激しく・深く推し進めていきたい。自分の母国語運搬能力が貧弱なのだからそれは止むを得ない。また、自己の内面が未だ未成熟なままであるためにそれはやむをえないのだ。

上記の日記の中で、「フローニンゲンでの学びは自分の人生において最大のものになる」と言及している。それは嘘ではないが、それが実現するためには、フローニンゲンで過ごす三年目の生活がいかようであるかにかかっている。

フローニンゲンで暮らす最後の年は、欧州での二年間の生活で得られた全ての学びを自分の中で咀嚼し直すことに力を注ぎたい。それらの学びと経験が全て自己の中で統合された瞬間に、私は次の活動拠点に向かうことができると思うのだ。今回米国に戻ることができなかったのは、この二年間の学びと経験が未統合であり、その統合をやり切るように何者かが自分に促しをもたらしたことによるのだと思う。

さて、これからブダペストの観光に出かけたいと思う。今日はまずリスト博物館に足を運ぶ。今日の学びと経験もまた、今後ゆっくりと熟成されていく宿命を帯びているのだと思う。ブダペスト:2018/4/18(水)10:28

815. 体現的認知とエントロピーの推移

今日は夕方から「複雑性とタレントディベロップメント」のクラスに参加してきた。このクラスはいつも、言葉にならないぐらいの学びを私にもたらししてくれる。今日のクラスもこれまでと全く同様に、実に学びの多いものであった。このコースを担当するマライン・ヴァン・ダイク教授とラルフ・コックス教授は、いつも私の探究活動の幅をさらに広げ、さらに深くしてくれるような観点を提供してくれる。

特に、コックス教授は私の関心と完全に合致する専門性を持っており、先週も彼の研究室でミーティングを行ったのだが、今年中に数本はコックス教授と何かしらの協働論文を執筆したいという思いがある。実際に、具体的なテーマもあり、コックス教授との協働論文を執筆する日が今からとても待ち遠しい。

今日のクラスのテーマは、「体現的認知(embodied cognition)」と翻訳することができるだろうか。その翻訳が正しいものかはさほど重要ではなく、この概念が意味することの方がより重要であろう。正直なところ、この概念は、私が米国のジョン・エフ・ケネディ大学の大学院に留学していた頃からよく耳にしていた。特に、脳神経心理学や身体心理学のコースの中で取り上げられることが多かったと記憶している。

簡単にこの概念の意味することを述べると、私たちの認知とは、決して脳の中にあるわけではなく、環境の中にあるわけでもないことを示唆する。それでは、私たちの認知はどこに存在するかというと、身体(body)・心(mind)・脳(brain)・環境(environment)の相互作用の中に存在している、と示唆するのが体現的認知と呼ばれるものの正体なのだ。

この概念は、以前紹介したように、私たちの認知が身体・心・脳・環境の相互作用が生み出す文脈の中で緩やかに構成される、という考え方とほとんど同じである。本日のクラスは、この体現的認知についてより多角的な観点から理解を深めることが目的であった。そうした主目的に付随して、先日、自分で論文を読み進めていたテーマと合致するトピックが本日のクラスで取り上げられた。それ

は、ダイナミックシステムとしての私たちの知性や能力が発達するときに、システム内のエントロピーが増大するという現象についてである。

偶然ながら、私が先日読んでいたのと全く同様の論文をコックス教授は引用しながら、ダイナミックシステムの位相変異とエントロピーの増大との関係性について解説をした。それを聞きながら、堰を切ったように、今の自分が従事している研究に関して新たなアイデアが湧き上がってきた。こうした状態に陥ると、外界からの情報が一切遮断され、私は自分の内側の世界の奥底に入り込むような感覚になる。そうした感覚の中で、自分の取り留めもない考えをただひたすら文字や図の形でノートに書き出していくのだ。

こうした衝動的な行動が収まった後、顔を上げて再びコックス教授のレクチャーに戻ると、幾分時間を忘れて自分の思念を外に吐き出すことを行っていたのだと気付いた。ここで細かなことを論じることは避けるが、重要なのは、エントロピーというダイナミックシステムにおける変動性が増加局面に入ると、それはシステムが次の位相に移行することを示す予兆となりうるのだ。現在の位相において、システムがある一定量のエントロピーに耐えられなくなる時、システムは非連続的に次の位相に移っていく。すると、面白いことに、システム内のエントロピーは再び減少するのである。

そのため、ダイナミックシステムの質的発達を捉える際に、エントロピーの増加と減少、特にエントロピーの極限值を捉えることが重要になる。ダイナミックシステム内のエントロピーの変化を捉える手法としては、まさに今朝取り扱っていた「状態空間グリッド (State Space Grid)」や「再帰定量化解析 (Recurrence Quantification Analysis)」などがある。これまで、状態空間グリッドや再帰定量化解析が示す指標を何度も見てきており、それらの中にエントロピーの度合いを示す指標があることを知っていたのだが、ダイナミックシステムの位相変異を捉えるために、この項目を活用することを意識したことはなかった。

今改めて、クラスの中で走り書きしたノートを見返してみると、エントロピーという指標を研究論文の“Results”のセクションに盛り込まなければならないと記載されている。ぜひ、エントロピーの推移にも着目して、分析結果を解釈したい。2017/3/8

昨夜から少し気づいていたのだが、日が落ちるのが遅くなっている。また、今朝起きた瞬間に気づいたのは、日が昇るのが早くなっているということだ。いよいよ新しい季節が到来する予感がする。そのような期待の入り混じる気持ちの中において、早朝の書斎の窓の外に広がる霧の世界は、それはそれで何か情緒のようなものを醸し出しているように感じた。

フローニンゲンの真冬の時代に経験した白銀世界とはまた別のものが、今日の前に広がっている。白く鬱蒼とした霧が辺り一面に漂っているのだが、重々しい気分をもたらすわけでは全くなく、逆に、趣深いものを感じさせてくれる。それはあたかも、目の前に広がる深い霧の中に溶け込んでしまいたいと思わせるような景観だ。目の前を覆う深い霧を避けるのではなく、霧の真っ只中に分け入って前に進むこと。その先に切り開ける世界がどれほど清々しく映るだろうか。

今の私は、果敢に深い霧の中に入り込み、自分の存在がそこに溶け込んでしまうぐらいに自分の仕事に打ち込みたい。昨夜も自分の内側でみなぎるような活動エネルギーを感じていた。一夜明けてみても、自分の存在を打ち震わすようなほとばしる活力を確かに感じている。今日もいつもと同様に、習慣の中に自己を置きながらも、仕事の中に自己を溶解させ、常に新たなものを掴んでいくような日にしたい。

ここ数日間、なぜだか深夜に一度目を覚ますことが多い。睡眠の質は高く保てていると思うのだが、どういわけか深夜未明に一度目を覚ます。それも決まって、大量の情報や体験が、一塊となって猛然と姿を表す強烈な夢を見た後に目を覚ますのだ。昨夜も例外ではなかった。

夢の中で自分の内側に引き起こされるエネルギーは、覚醒時のそれを圧倒的に凌駕する。自分でもそれには驚かされることが頻繁にある。やはり、私の内側には、未だ表に現れぬ生命エネルギーの大きな塊のようなものが眠っているように思えて仕方がない。安易にこうしたエネルギーを潜在能力と表現したくはないのだが、確かにそれは、未だ姿を現さずに自分の内側に潜伏しているものであることに違いはない。こうした潜在的なエネルギーというものが、徐々に表に出てこようとしていることを日々感じている。私はこのようなエネルギーを意図的に活用しようと思ったことはなかったし、このようなエネルギーが自分の内側に眠っていることも知る由もなかった。

ただ、このように日々の自分の内側の動向をつぶさに観察していると、内側の奥底か自分の存在を取り巻く全体のどこかに、巨大なエネルギー体のようなものがあることを疑うことはもはやできなくなったのだ。そうしたエネルギー体の流れが自分の内側に還流し始めている。このエネルギー体とのつながりを途絶えさせることなく、とにかく日々の生活を規律と献身と情熱に満たされたものにしていきたい。2017/3/9

817. 状態空間分析と状態空間グリッド

今日は午前中に、研究論文の“Method”のセクションを執筆していた。今回の研究では、「状態空間分析」「トレンド除去変動解析」「交差再帰定量化解析」という三つの手法を適用する予定であり、本日執筆を終えたのは、「状態空間分析」に関する記述である。この手法は、ダイナミックシステムの挙動を状態空間において視覚的に捉えることを可能にする。特に、ダイナミックシステムの挙動がアトラクター状態を示すのかどうかを特定することも可能であり、さらには、アトラクター状態の強度までも分析することができる。

状態空間分析は、ダイナミックシステムの挙動に関してその他にも重要な情報をもたらしてくれる手法であるが、今回の研究では主に、アトラクターの種類とアトラクター状態の強度を分析するために活用しようと思う。状態空間分析を最も簡単に活用するソフトウェアに「状態空間グリッド(SSG)」というものがあることを以前紹介したように思う。このソフトウェアを使うと、発達科学者のイサベル・グラニックの研究を例にとれば、親と子供間における感情状態の変遷を分析することができる。

彼女の研究では、親の感情状態と子供の感情状態という二つの変数の関係を一つのシステムと見立て、そのシステムが状態空間の中でどのように動くのかを分析している。より具体的には、親の感情を四つの種類に分類し(敵対感情、否定感情、中立感情、肯定感情)、子供の感情についても同様の分類をして、 4×4 のマトリクスとして状態空間を構成する。親子間のやり取りの推移に応じて、親と子供の感情の組み合わせがどのように推移するのかを視覚的に捉えることを可能にするのがこのソフトウェアの特徴である。時には、親が子供に肯定的な感情を持っていながらも、子供が親に対して否定的な感情を長らく持っているかもしれない。

その場合には、状態空間のマトリクスの中で、(親:子供)=(肯定感情:否定感情)がアトラクター状態とみなすことができるだろう。その後、親子間でのやり取りが継続していく中で、そのアトラクターを抜け出し、また別のアトラクターに落ち着くかもしれないし、絶えず感情の組み合わせが動的に揺らぐ可能性もある。状態空間グリッドを用いれば、このような分析を簡単に行うことができるのだ。グラニックの研究にせよ、今回の私の研究にせよ、二つの変数関係を一つのシステムと見立てているため、状態空間は二つの変数から構成される。

しかし、より多くの変数を状態空間グリッドを用いて分析することも可能である。ただし、これまでの文献調査をもとにすると、三つ以上の変数を用いて状態空間分析をしたものはほとんど見かけたことがない。そうした研究にも今後着手してみたいと思う。とりあえず、状態空間グリッドについて説明する箇所を執筆し終えたため、今から「交差再帰定量化解析」に関する箇所の執筆に取り掛かりたい。

日本語での日記のみならず、英語での学術論文の執筆を毎日行うことを新たな習慣にしたことを思い出し、明日も少しでいいので、論文の執筆に取り掛かりたいと思う。ピアニストが毎日ピアノを演奏するように、彫刻家が毎日彫刻を掘るように、そして、人間が毎日呼吸をするのと同様に、私も日記と論文を毎日執筆したいと思う。2017/3/9

818. グループダイナミクスの原体験として

今学期に履修している全てのコースがグループワークを要求していることについて、以前書き留めていたように思う。「複雑性とタレントディベロップメント」のコースは、二人一組となり、小さな「発達プロセス研究」を行うことが最終課題として要求されている。また、このコースは毎回のクラスの後半で、グループワークを行うことが課せられている。最終課題については、同じプログラムに所属するインドネシア人のタタと一緒に取り組んでいる。

また、毎回のグループワークは、オランダ語グループではなく、英語グループとして取り組んでおり、そのメンバーはいつも同じ四人である。私が強くこのコースに勧誘したオランダ人のピーターと、ドイツ人のフラン、インドネシア人のタタ、そして私の四人で昨日もグループワークに取り組んでいた。毎回グループワークをしながら思うのだが、提示される課題が実によく練られていて驚く。グループ

ワークで提示される課題は、前半のレクチャーで聞いた概念や理論と実際の研究を橋渡しするような内容になっている。

レクチャーを聞いた後、別室に移動し、与えられたデータをもとに、講義内容を四人であれこれ議論しながら課題に取り組むことは毎回大きな学びになる。そして、グループワーク後に、一時間弱にわたって一人の教授から課題の回答に対してフィードバックをもらえることは、何よりも大きな学びになっている。毎回、私たちの英語グループは、非線形ダイナミクスの特権家であるラルフ・コックス教授からフィードバックをもらうことになっている。昨日のフィードバックセッションでは、ロバート・シーグラの「多重波モデル」やフローリス・ターケンスの「埋め込み定理」について議論が盛り上がったのを覚えている。

そうしたフィードバックセッションの前に行った実際のグループワークでは、クラスの回を追うごとにメンバーの関係が親密になり、意見交換がしやすい雰囲気が醸成されている。四人のメンバー間の関係性が深まったところで、私は前々からドイツ人のフランに対して言おうと思っていたことを素直に述べた。

フラン:「いや、ピーターの意見もわからないではないけど、この回答はレベル2だと私は思う」

私:「まあまあ、落ち着いてよ、『ボス』」

フラン:「誰がボスよ笑」

私:「いや、どう見てもフランの口調や態度はボスでしょ笑」

タタとピーターが笑いながら頷く。

前々から私はフランにそのことを伝えたいと思っており、昨日のグループワークの中でそれを伝えることができ、今は非常に爽快な気分である。帰宅後、夕食をとりながら、来週のグループワークの中で、フランのことを「キング」か「クイーン」と呼ぶことに決めた。そのように呼ばれた時のフランの反応やタタとピーターの反応を想像するだけで笑いが込み上げてきた。それは、食卓の窓から見える暗闇を消し去るような明るさを持つ笑いであった。

それほどまでにグループ内の関係が良いものになってきているのは、面白い現象である。そして、そうした良好な関係性がグループワークの質を確かに向上させていることも面白いと思う。私の中で、グループダイナミクスは、もう少し後になって取り組む予定のテーマだが、多国籍かつ多様なバックグラウンドを持つ人たちとのこうしたやり取りは、きっと今後の探究の原体験の一つになるだろう。

2017/3/9

【追記】

ブダペストのフランチ・リスト空港に無事に到着した。セキュリティを早々にくぐり抜け、今は搭乗口付近のラウンジにいる。今回の中欧旅行で訪れた街を振り返ってみると、ワルシャワにせよ、ブダペストにせよ、アジア人の数がとても少なかったように思う。どこにでもいる中国人でさえ少なかったように記憶している。ヨーロッパの他の国々と比較して、ポーランドやハンガリーという国は、アジアの人たちが積極的に足を運ぼうとするような国ではないのかもしれない。

もう私は随分と同民族の少ない場所で生活してきたが、今回はワルシャワとブダペストで数回ほどアジア人の少なさを意識せざるをえなかった瞬間がある。数日前にブダペストのバルトーク博物館を訪れた時、受付の若い男性が、「ハンガリーはゆっくりだけど進歩しています」と笑顔で述べていたことが思い出される。とりわけ経済的な発展に関しては、ハンガリーという国にはその余地が多分に残されていることを実感した。それはポーランドにおいてもそうだ。これまではオランダというすでに発展を遂げた国で生活していたため、欧州にこうした発展途上国がまだまだ残っていることを改めて実感させられるような旅だった。ブダペスト:2018/4/21(土) 10:00

819. うららかな春の朝の恩寵

早朝、いつもと同じ時間に目を覚ました瞬間に、何かが違うと感じた。寝室の窓の外に広がる景色が、これまでのような闇の世界ではなく、薄青色の世界になっていたのだ。日の出が早くなり、いよいよフローニンゲンの街にも春が近づいてきていることを感じ取った。思えばこの三週間は、断続的な雨が続く日が多く、一日中快晴の日はほとんどなかった。

だが、天気予報を確認すると、今日からはこれまでとは打って変わって雨の日はほとんどなく、快晴の日が続くことがわかった。季節の変わり目は、まさに昨日と今日の間にあっただのではないかと思う

ほど、取り巻く天候が大きく変動した。正直なところ、早朝の今の私の気分はこれまでにないほど爽快であり、闇の世界から光の世界に参入した歓喜にも似た気持ちで満たされている。書斎の窓の外に広がる雲ひとつない青空は、それぐらいに澄み渡っている。

この文章を書いている最中に、私は何度窓際に駆け寄り、外の世界を眺めただろうか。早朝の淡くまばゆい太陽光が全てのものを優しく包み込んでいる。赤レンガの家々、新緑を待つ木々、そこにやってくる小鳥たち、犬の散歩をする人たち、通行人や車。それらの全てが、春の太陽と青空の下にある。私の目には、生命も非生命も、早朝の太陽と青空に包まれながら歓喜の踊りを踊っているようにしか見えなかった。そこには、物質と生命の確かな躍動があり、何かの始まりを告げるものが確かにあった。

そうした躍動感や新たな始まりをもたらすのは、私たちを超えた自然の力かもしれないし、あるいはさらに超越的な力なのかもしれない。いずれにせよ、今日の前に広がる世界には、人知を超えた世界からの恩恵や恩寵が降り注がれている。

私は、こうした恩恵や恩寵に絶えず気づいていたいと思う。それらを享受しようとするのではなく、それらを見出すことだけで十分なのだ。そうした恩恵や恩寵に気づく時、それらは自然と私たちの内側に流れ込んでくる。そして、私たちの存在そのものが、恩恵や恩寵を授かったものだということに気づくだろう。

私は多くを望まない。こうした感覚を日々の生活の中で感じ、その感覚の中で生きることさえできればそれで十分だ。恩恵や恩寵を常に見出し、それを感じながら日々の仕事に黙々と取り組むこと。それこそが、観想的かつ黙想的な生活なのだと思う。

早朝からこのような気分になったのは、何ヶ月振りのことだろうか。全てのものを丸裸にし、全てのものを溶かしてしまうかのような、うららかな春の朝の世界の中で、私は静かで濃密な幸福感を感じている。今日一日を生きることが楽しみで仕方ない。2017/3/10

820. 神々が宿る鳴き声と道

窓の外の世界で、様々な小鳥が綺麗な鳴き声を奏でていることに気づいた。私はふと仕事の手を止め、小鳥の鳴き声に耳を澄ませていた。不思議なことに、それらの小鳥の鳴き声は、書斎に鳴り響くモーツァルトのピアノ曲よりも遥かに美しいように思えた。まさに、それを「神々が宿る鳴き声」と形容してもし過ぎではないだろう。

目の前の木々にとまっている小鳥たちの鳴き声が、こうも美しく、こうも自分の心に響くのはなぜなのかを考えずにはいられなかった。それらの鳴き声は、目の前の通りを走る車の音に簡単に掻き消されてしまうほど小さなものである。そして、自分の心にゆとりがなければ気づくことさえできない音だと言えるだろう。今私の耳に聞こえて来る小鳥の鳴き声は、そのような特徴を持っているのは確かだ。

しかし、それ以上に大事なものがある。私が小鳥の鳴き声を美しく感じ、自分の心に深く染み渡っていくように感じているのは、他でもなく、小鳥と私が同じ世界をこの瞬間において共有しているからなのではないか、と思ったのだ。

モーツァルトのピアノ曲を凌駕する美しさと心に響くものを感じたのは、そこにいる小鳥たちが、私と同じ時間と場所を共有しながら、目の間に広がるこの瞬間の春の朝を共有しているからだと思ったのだ。私には、小鳥たちが自分と同じように春の朝を感じているようにしか思えない。この鳴き声は、春がやってきたことを祝福するものであり、歓喜の表現であるに違いないのだ。私はしばらく、モーツァルトのピアノ曲をいったん止め、小鳥たちの鳴き声にただただ耳を傾けていた。

小鳥の鳴き声が私の内側に染み渡っていく。同時に、私の内側から湧き上がってくるものがある。内側に入ってくるものと出ていくもの。染み渡っていくものと滲み出るものの双方を感じている時、もはやそこに私という存在はなかった。そこにいたのは、流れ込むものと湧き上がるものを受け入れ、見守る通路のような存在だった。透明で、純粹で、形のない形を持つ道がそこにあった。これに気づいた時、私は道を歩いているのではなく、本当に道そのものに他ならないのではないかと思ったのだ。

これはとてもおかしな気づきだった。私には間違いなく、肉体と精神が備わっており、それらが私を象徴するものであることに変わりはないだろう。だが、自分の肉体や精神を超えたものが、自分でありうるということに気づけたことはとても大きなことのように思える。私は生まれてからこの瞬間まで、自分という存在が道であるという真の自覚を持つことはなかったように思う。

この気づきは、道ではない私に付着した諸々のものを打ち壊し、全てを道の中に再構成させるような強い作用を持っていた。道の中に道として生きる日が、徐々に近づいてきていることを知る。それを促してくれたのは、他でもなく、目の前にいる小鳥たちであった。私の目には、彼らが音楽のソムリエのように映り、その時の季節や感情に合致した音楽を私に届けてくれるように思えた。

いや、小鳥には知識や経験から音楽を選定するような作為は一切なく、純粹に今感じているものを鳴き声として外の世界に表現しているだけだろう。この瞬間に感じているものを表現するというシンプルな行為は、純粹な結晶のようであり、私は小鳥たちが感じているものに共感し、それが具現化された結晶としての鳴き声に心を打たれたのだろう。

窓の外では、まだ小鳥たちが鳴き声を奏でている。彼らは何かを呼んでいるようだ。何を呼んでいるのだろうか。彼らは何かを呼んでいるのではないだろう。道が私を呼んでいるのと同じように、道が小鳥たちを呼んでいるのだ。だから歌うのだ。2017/3/10

【追記】

この日記はとても重要なことを述べているように思えた。自分という存在が道に他ならないという大きな気づき。自分が道を歩いているのではなく、自分が道に他ならないという気づきは、今の私にとっても響くものがある。一昨日、私はブダペストを代表する建造物の聖イシュトヴァーン大聖堂で行われたパイプオルガンのコンサートに参加した。その時の体験はまさにこの気づきと密接な関係を持っていることに気づく。私が音楽を聴くのではなく、私が音楽そのものになるという感覚。大聖堂に鳴り響く音の通り道に自分になっていたという確かな感覚が今も残っている。

私は道を歩いているのではなく、道に他ならない。私が音楽を聴くのではなく、音楽を作るのでもない。私という存在は音楽の通り道なのだ。そんな気づきをあのオルガンコンサートは私にもたらしてくれた。ブダペスト:2018/4/21(土)10:11